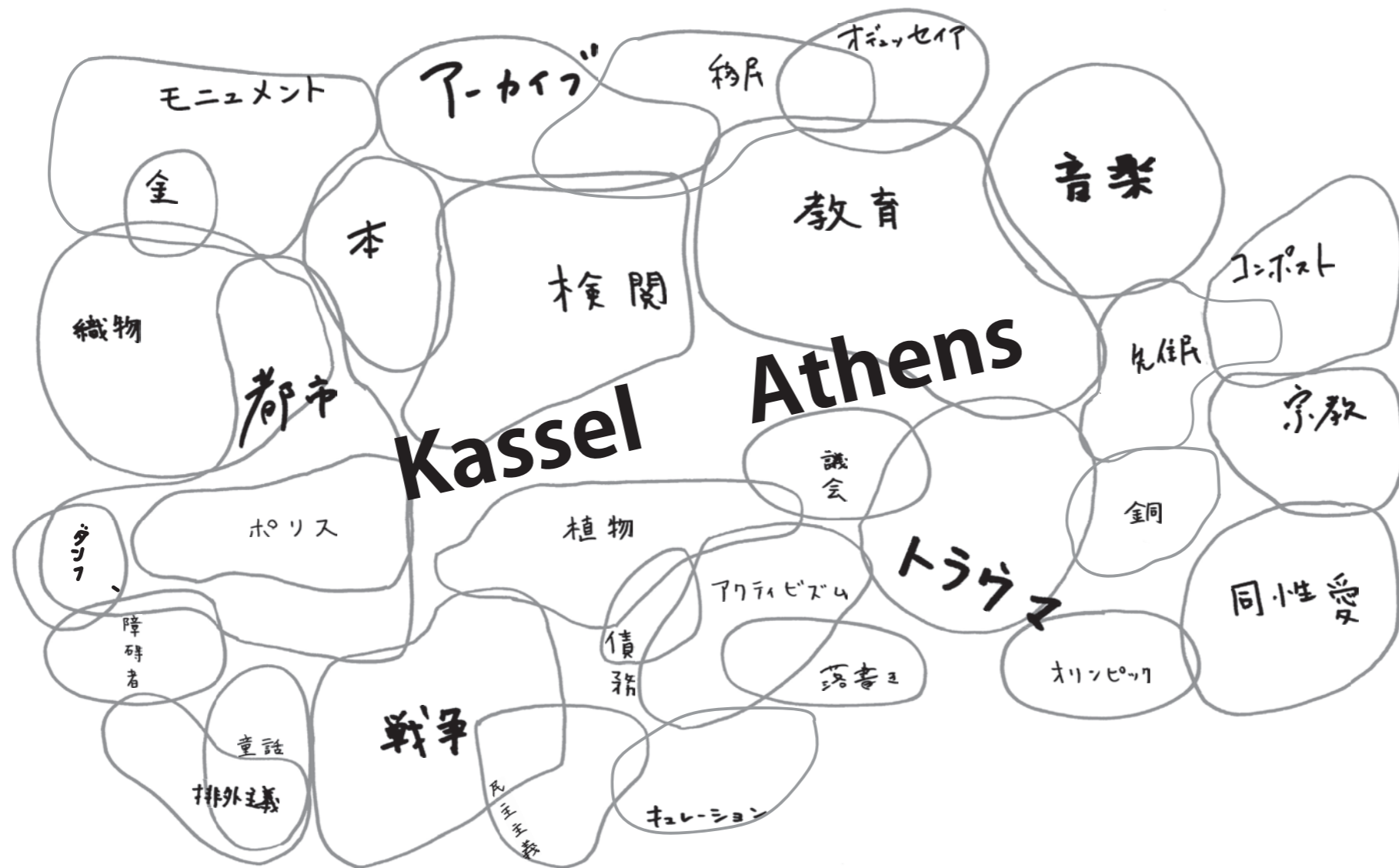


このまえのドクメンタって結局なんだったのか?!

シリーズトラウマとアーカイブ vol.3



講師：石谷治寛

芸術資源研究センター研究員 / 芸術論・現代美術史

石谷治寛（いしたにはるひろ）芸術論・現代美術史。京都市立芸術大学芸術資源研究センター研究員、非常勤講師。十九世紀フランス美術と視覚文化に関する研究から、外傷記憶の再演を扱う現代アート、メディア芸術の保存とアーカイブなどを考察。京都国際芸術祭パラスフィア 2015 や、岡山芸術交流 2019 に関する論考もウェブ媒体に発表している。著書に『幻視とリアリズム—クールベからピサロへ フランス絵画の再考』（人文書院）。共同企画に『MAM リサーチ 006: クロニクル京都 1990s—ダイヤモンド・アー・フォーエバー、アートのスケープ、そして私は誰かと踊る』（森美術館）など。

ドクメンタとは5年毎にドイツのカッセルという街で行われている国際芸術展です。今回のアーカイブ研究会では、2017年のドクメンタとは何だったのかをあらためて振り返ります。ドクメンタは、第2次世界大戦中に国が規範にそぐわない近代美術を禁止したことへの反省から、戦後に開始された現代美術展でした。そうした経緯から、表現の自由を象徴する展覧会として、国際的に注目され続けています。2017年に行われた14回目のドクメンタでは、ギリシアのアテネとも共催で、両都市間の連携がなされました。その背景には、ギリシアの文化や思考法が西洋文明にとって重要な規範になってきただけでなく、現在の欧州においても、南と北の経済格差や、地中海を超えて流入する移民など、さまざまな欧州の歴史と現在を照らし出すと考えられたからでした。ドイツーギリシア間とそこから広がる重層的な歴史を主題にした展示物の中には、美術作品や音楽だけでなく、アーカイブ資料の提示も含まれ、パフォーマンスや議論を通して、トラウマ記憶を再演する試みもみられました。本研究会では、さまざまな主題に分けて、全体像を読み解きながら、終了後の論争もふまえて、ドクメンタ14をいま振り返ります。

2019年

12月17日(火)17:30-

会場：芸術資源研究センター